



立教セカンドステージ大学 8期生クラブ活動

名画(美術)鑑賞友の会

活動報告書

(創刊号)

活動テーマ

「最後の印象派」展 鑑賞会

参加者

9名

実施日時

2015-10-21 11:00～12:30

活動場所

損保ジャパン日本興亜美術館（新



会員：本科の受講生 10 名（2015 年 10 月現在）

動機：現役で働いていた頃、同様な会を立ち上げ、美術展を鑑賞した楽しい思い出がある。RSSC に入学したが美術の会がなく立ち上げた。

活動計画：月 1 ～2 回美術展鑑賞。鑑賞後は近くのティーサロンで感想を話合う。

今後の方針：美術展の鑑賞が中心となるが、時に幅を広げて芸術（陶芸、工芸、

彫刻、観劇等）鑑賞も取り入れて行く。同窓会同好会をめざして活動する。（主宰 渡辺敏幸 記）

「最後の印象派」展 鑑賞記

秋の風が涼しい 10 月 21 日、第 1 回の鑑賞会が開かれた。

損保ジャパン日本興亜本社ビル 4 2 階にある新宿の街を一望できるギャラリーだ。

この展覧会では、印象主義や新印象主義といった 19 世紀のスタイルを受け継ぎながら、親しみやすく甘美な作品を描いたカリマール、アマン＝ジャン、ル・シダネルら、20 世紀初頭のパリで活躍した芸術家たち約 20 名の作品約 80 点が展示されている。また、このギャラリーの収蔵品コーナーでは、ゴッホの《ひまわり》、ゴーギャンの《アリスカンの並木道》、セザンヌの《りんごとナプキン》をはじめ、東郷青児やグランマ・モーゼスの作品も鑑賞できる。

約 1 時間半、各自、自由に鑑賞した後、都庁ティールームに移動して感想を交換し合う。

エルネスト・ローランの《背中》は作品の醸し出すやわらかい雰囲気が良い。同じくローランの《後ろ姿の裸婦》については丸みを帯びた後ろ姿に魅力を感じた。アンリ・マルタン《野原を行く少女》は作品中に描かれた光と光に映える花の色彩が美しい。エドモン・アマン＝ジャン《囚われの女》は画中の女の目の寂しさにも心惹かれた。

印象派すなわち明るい自然光を描いているという印象をもっていたが、アンリ・ル・シダネル《コンコルド広場》は、良い意味でその印象を覆した。雨後の濡れたアスファルトに反射する街灯の明かり、人工的な照明を描いたその美しさに、なるほどと頷かされた。印象派にもこんな絵があるのかと、目から鱗が。

一人で観に行く展覧会もよいが、今回のように観賞後の感想を交換すると、ひとそれぞれの見方の違いがわかって面白い。次回の鑑賞会にも大いに期待したいところだ。（齋藤恭子・記）



名画(美術)鑑賞友の会主宰 渡辺敏幸 tokyo.tomine-toshi@ezweb.ne.jp